

観る人の孤独

吉田 史子

ここ何年か私は柏崎驍二の『読書少年』から『北窓集』までの七冊の歌集を時間をかけて読んできた。その中で明るく澄んでいるのだがどうしても近づけない透明な壁のようなものを感じて立ち止まることしばしばあった。それはいったいなぜなのか、歌集を読み終えたのちもずっと大きな宿題を抱えているような気がしている。

それをいくらかでも解き明かし、柏崎作品の新たな魅力に迫りたいというのが本稿の目的である。

まず歌集には入っていない第一回桐の花賞受賞作品を見よう。桐の花賞の第一回は昭和三十九（1964）年、作者は二十三歳であった。

硝子戸の凍りゆく夜井戸端に榎の皮をむく
母思ひみつ

愛しえぬ悲しみふかし帰り来て夜を走る犬
に口笛をふく

風ありて木々揺るる朝友は多く基地撤去集
会に出でてゆきたり

顔ややに上向きしままベース弾く盲学校の
少年を見ぬ

夕潮の満ちくるころをひとつ鶉は海面をひ
くく沖にむかへり

「静かな若さがある。柔かく、清純だ。（略）乾きや苛ちや激情がなく、何か若く丁寧な思いめぐらしがある。」（「コスモス」昭和三十九年六月号原文のまま）と推薦の言葉がある。定型に言葉が無理なく収まり、清潔で若々しい内容を伝えている。柏崎の持つ若さは外に向かって弾けるようなものではなく、内に静かに向かう思考に現れている。母や友人を詠むにしても自然を詠むにしてもその作品は清新な叙情と落ち着きを宿している。そしてその資質は生涯損なわれることはなかった。

逆さまになりて湯槽を洗ふときわあんと寂
シタイルの青さ

庭雪のほのかなる夜を縫ふ妻の糸搓はじく
音のさびしさ

あかときを覚めてゐる子に鈴ふりてわれは
さびしもこの小世界

おほかたは寂しき人の生ならば寂しさよと
きに勁くかがやけ

第一歌集『読書少年』において使われている「寂し」「さびし」は全部で十五首になる。ほかの感情表現の言葉は「かなし・かなしむ」が六首、「やさし」が四首である。とすればこの「寂し・さびし」の多さは突出している。歌集中の前半、結婚をし子どもが生まれてからの生活で「寂し・さびし」が多く使われるようになった。独身の時も当然寂しいという感情があるわけだが、自分一人の内に向かう感情である。愛する人と結婚をし子どもが生まれる。それは祝福されこそすれ寂しさとは無縁であるはずだ。このときの寂しさは決して負の感情ではない。自分がいて妻がいて子がいて、それぞれが個としての存在である。家族ではあるが一人ひとりが生を持つけなげないとおしい存在であるという思いに至るときにあふれ出てくるものが寂しさなのかもしれない。人間が人間であるゆえに持つ寂しさ、存在の持つ寂しさと言ってよいだろうか。

『読書少年』で作者は「寂しさ」が自分の裡深く住むことをはつきりと自覚したのである。

では、その後家族はどう詠まれたのだろうか。

長の子をゆふべ吐りきそれのみが一日の清
き部分のごとし 『読書少年』

をさな子の本を読むこゑその母の菜を刻む
おと外の鳥の声

壁にゐるかなぶん碧し妻と子と行きし祭の
音とほき夜 『青北』

ストローブの音たつる傍に思ひをりわが子ら

はわれにものを強らぬ

仕事ごと夜夜なにかしてをればわが二人子
もしづかなりあはれ

秋となる湿原をスケッチするあひだ岩に腰
かけ妻と子は待つ 『四月の鷺』

膝のうへに猫抱きて母はゐたりけり霧深く
して海をとぎす日

二人の子の親となつた柏崎には子どもたちを詠んだ歌も多い。子どもたちは本を読み遊び親の言うことをよく聞いていることがわかる。一首一首が「聖家族」と題がついた一枚の美しい絵のように浮かんでくる。

子どもが成長するにつれ幼い頃に比べれば抱っこをしたり一緒に遊んだりという場面は少なくなってくるだろう。これらの歌の多く（掲載しきれなかった歌も含めて）には父親（作者）と子どもたち、あるいは父親と妻子たちという図式が見えてくるような気がする。それは父親である作者が子どもたちや妻をよく見て歌の対象としているところからくるものであろう。

〈とどのつまり歌が好きなのさ、さうなのさ、毎日うたを考へてゐる〉（『青北』）と詠むことができたのは柏崎が意識していたかどうかはわからないが家族の理解と敬意があったからだろう。歌は柏崎の中で大きな位置を占め、歌について考えることが生活に組み込まれている。生きることの寂しさを柏崎は愛情をもつて豊かに表現しているのである。

こうして考えてみると柏崎は見る人、観察する人であるこ

とに辿りつく。観察という冷たい気がするが、冷たい温かいの問題ではなく、どうしようもなく一歩離れて見て（観察して）、「ほう、そうかそうなんだ」と納得する人なのではないかと思われる。それが柏崎の歌人としてのまなざしである。そうすると柏崎が美術が好きなことにも容易に結びつく。

歌集の中には画家、版画家の名前がたくさん出てくるが、特に長く「コスモス」の表紙を飾った駒井哲郎の版画については連作（『月白』）を作っている。

見るということについて私はかつてこう書いている。「コスモス」（2016年八月号）『読書少年』小論「寂しさ」というまなざし」より。

「柏崎作品を清潔で寂しい叙情の世界と括ってしまつてよいのだろうか。」

まなぶたをしろく閉ざして吊られたる雉子
に夜ふけの月明り差す

涼しかる風さきだてて来し雨が石のおもて

の花粉をあらふ

これらの作品に共通して言えるものは比類無き観察眼の確かさである。まるでスペインリアリズムの系譜に連なる写実絵画のようだ。主観で体裁よくまとめようとせず、徹底的に見る。対象はことさら美しいものではないが、柏崎の目を通してしっかりと光を放つ存在が現れる。この観察することの時間的、技術的な辛抱強さを支えているものは、表現することへの激しい希求である。（引用歌二首省略）

柏崎は第一歌集の時から見ることに、観察することに対して

は強い意欲をもって取り組んできた。これは柏崎の作品を支える大きな特長であると思う。対象や物事をおおまかに捉え表現するのではなく先にあげた作品のように細かく時間的推移も含めて表現していくのである。

しふぢやくを捨つべしと古き書にいへど歌
書くにその執着が要る

観察することイコール「執着」と言つてよいだろう。そして見るため観察するためには離れなくてはならない。

対象と同化しては見ることはできないのである。

対象との距離に関して二人の歌人がこう書いている。

「短歌研究」（2016年七月号）「純」にして「勁」たる人」と題して高野公彦はこう語る。

「人間や社会を見る眼に歪みが無く、柔和な眼差しで対象の内部をさらりと掬い取る。家族や教え子や友人に対して小さな距離を置くような接し方をして、かつ温かい情愛をそそいでいる。」

「歌壇」（2021年十二月号）「平成に逝きし歌びとたち 柏崎驍二「静かな格闘のひと」と題して梶原さい子は家族の歌をこうまとめた。

「家族の姿は、絵じて、けなげで、優しく、慎み深い。それがある距離感をもって作者は見つめ、清潔な言葉で表した。」

これらの文章が書かれた時間には五年の隔たりがあるが柏崎の作品を愛し理解する二人が期せずして「距離感」という言葉を用いていることに大いに力を得、安堵した。

柏崎の作品において自然詠は大きな山脈のような存在感で

美しく際立っている。それは岩手という風土が生んだものに間違いなだらう。

彫金師かすかに銀を打つ音のちりちりと天を降りくる寒さ

『四月の鷺』

吹雪くなか来る人はみな頭垂れ、春の蕨の

ごとく頭垂れ

『百たびの雪』

野萱草茎太く咲く朝のみちかならずやよき生きかたあらん

透きとほるうぐひすかぐらの実を食べて道を逸れたる七月の森

『北窓集』

逃れ得ぬ風土のありてこの川に戻りくる南部鼻曲がり鮭

どの歌をとっても作者が深く愛した岩手の自然、そこに暮らす人々の生活を含めた風土が実感をもつて描かれている。作者が生き生きしているのはやはりこのような風土を詠んだ歌である。そこには対象と自分との間に距離はない。自然の中にたつぷりと抱かれて、思索にふける。それが柏崎の風土の歌である。このとき寂しさは生の原動力として働いている。柏崎の作品について書かれた文章を読んでいくと、「岩手を離れることはなかった」というような内容が散見するが、人は生まれ育った土地をそうやすやすとは離れることはできないのではないだらうか。ましてその土地に家を建て、職についているとすれば離れる方が難しいだらう。

凍りたる滝を見上げて立つわれは寒き柱を

身の内にもつ

『月白』

北国をわれは出でざり冬ながく乾く手のひらに脂を塗りて

歌のこと半日語り東京の汚れたる夜を見て去らむとす

灯の領を出でて三時間みちのくの闇の寒さに髪膚よろこぶ

「身の内寒き柱」とは柏崎が持つ寂しさを端的に言ったものであらう。そして続く歌を読むと岩手から離れる選択はなかったことがわかる。

だからこそ柏崎の歌には「短歌について詠んだ歌」が多いのだと思う。自分の歌を見つめ、励まし、よりよい生を目指すために柏崎は多くの歌に関わる歌を詠んだ。その集大成と思われるのが次の二首である。

日の当たる枯草に一羽ゐる鳥の目立たぬ歌

『北窓集』

をわれは作らう

『北窓集』

歌書きて五十年過ぐおそらくは私の外のかのちから

柏崎と対象との距離とは決して遠ざかり離れた結果ではなく、個を保ちつつ、自分も人も活かすために必要なものであった。よりよい歌を作るためすなわちよりよく生きるため、柏崎はまなざしを研ぎ周囲のものをそして自らの内側を覗いたのだらう。柏崎の穏やかで静かな微笑みは豊かな孤独を物語っていたのにちがいない。